

Title	三木清著 唯物史観と現代の意識
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.8 (1928. 8) ,p.1155(139)- 1157(141)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280801-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- (一一) Cf. Diehl, op. cit., Bd. I, S. 313-314.
- (一二) Patten, op. cit., "The Interpretation of Ricardo," p. 144.
- (一三) C. H. Livermore, Carey & his Social System; Political Science Quarterly, Vol. V, 1890, Dec. No. 4, p. 581.
- (一四) Cf. Marshall, op. cit., p. 164.
- (一五) Cf. Livermore, op. cit., pp. 573, 580.
- (一六) Cf. Patten, op. cit., "The Theory of Dynamic Economics," p. 34.

三 木 清 著 「唯物史觀と現代の意識」

本書は著者の論文集で、(一)「人間學のマルクスの形態」(二)「マルクス主義と唯物論」(三)「ブラグマチズムとマルキシズムの哲學」(四)「ヘーゲルとマルクス」の四篇を収めて居る。此等の諸篇に説かれてゐるものは、著者自身の語を以てし、理論の系譜學(Genealogie der Theorien)の目論見「即ち如何にして一定のイデオロギイは出生し、成長し、崩壊し、そして新しいものによつて代られるかの系統を」理解せんとしたものである。而して此系譜學の根本命題は「歴史に於て存在は存在を抽象することによつて理論を抽象する」といふことにあると著者は言つて居り、而して此事を著者に教へたものはマルクスであるといふことである。

著者は本書に於て、マルクス若しくはマルクス主義の偉大を幾多の點に就いて力説して居るが、其點の一つは、マルクスに於て「理論と實踐との辯證法的統一」があるといふことである。マルキシズムに於ける理論と實踐との關係は、次の如く説かれて居る。

「マルクス主義は理論と實踐とを、第一のもの、第二のものとして、單に對立せしめるのではなく、却て兩者を辯證法的統一にもちきたす。そこでは理論は實踐の要求する限りの理論であり、實踐は理論に指導される限りの實踐である。理論と實踐との對立物は相互に制約し合ひ、實踐は理論に指導されることによつて發展し、かくして發展した實踐は更に新しき段階に於ける實踐を要求する。理論と實踐とはかゝる必然的統一に於て段階を通じて相互に發展する。斯の如き辯證法的統一の故に、理論は決して現實の地盤から游離することが出来ない。」云々(七〇)。而して三木教授に由ればマルクスに依るヘーゲル主義の克服も、事此に關するものゝやうである。

エンゲルスは「フオイエルバッハ論」の中で、ヘゲル主義に革命的「方面」と保守的「一面」とあることを云ひ、ヘゲルの體系に重きを措く者は、宗教上政治上に於て保守的となり、辯證法的方法に重きを置く者は両方面に於て革命的であり得たと謂つて居るが、(Kleine Bibliothek, 9)三木教授は此解釋をあまりに形式的なるものとして排する(一五六)。體系と方法との分離は、ヘゲルのつとめて反對した所であるから、若し體系が保守的であるならば、彼の方法にも保守的性質があるのでなくてはならぬ。而して實際ヘゲルの方法は或意味に於て保守的である。「彼の辯證法は定立、否定、綜合の單に無限なる進行ではない。……辯證法は、ヘゲルにあつては絶対的理念が *an sich* から *für sich* となり *An und für sich* に到る過程であり、この全體の道は理念がそも／＼最初に立つてゐた點に復歸することに外ならず一從つて斯る辯證法はその本性上「經驗的」であり、自己完結的」であるといふ(一二七、一三三)。元來辯證法は正反合の三の契機を具へて居り、其中正と反とは矛盾であり、合は矛盾の綜合であるから、結局矛盾と綜合との二方面を具へてゐるといふことが出来る譯であるが、ヘゲルは矛盾よりも綜合に重きを置いてゐる。これは現在の把握し方如何に由るもので、ヘゲルは現在を過去の結果として、回顧的に把握する傾がある。抑も生活態度には觀想的 (kontemplativ) と實踐的 (praktisch) との二があるが、ヘゲルの哲學的態度は根本的に觀想的であつた。而してこれは彼れの哲學の前提であつた汎神論と根源に於て繋がつて居るといふ(一四一)。然るにマルクスに至つては、これと反對に、辯證法の綜合よりも其矛盾の二面に重きを置いて居る。といふ事は、現在を未來への過程として、展望的に把握するといふことである。即ちマルクスの態度は、ヘゲルの其が觀想的であるに對して實踐的であるといふことになる。これを三木氏は現在を「その現在性に於て」認識すると言つて居る。

私は三木教授の思想を充分に理解してゐないかも知れぬが、右の一段には首肯し得るものが多いやうに感じた。たゞこれは平生ひそかに疑つてゐる所であるが、實踐的であるといふ其のマルクス主義辯證法にも、猶ほヘゲルに於けるものに似た自己完了的の一面があるのではないか。プロレタリアの勝利の曉には、最早何等の對抗何等の矛盾の起らぬかの如く説かれてゐるのがそれである。原始共産制が崩壊して階級闘争が起り、其階級闘争が更に共産主義に依て止揚せられるといふのは、彼のヘゲルに於ける絶対的理念が自己より出で、再び自己に復歸するのと其趣を同じうするものではないか。此一點は、ヘゲルを克服したといふマルクスに似合はしからぬことに思はれる。若し三木教授が此等の點にも論及して、マルクス辯證法の眞價を論ぜられたならば、讀者の所得は一層大きかつた事であらう。(岩波書店發行定價壹圓六拾錢)

小 泉 信 三